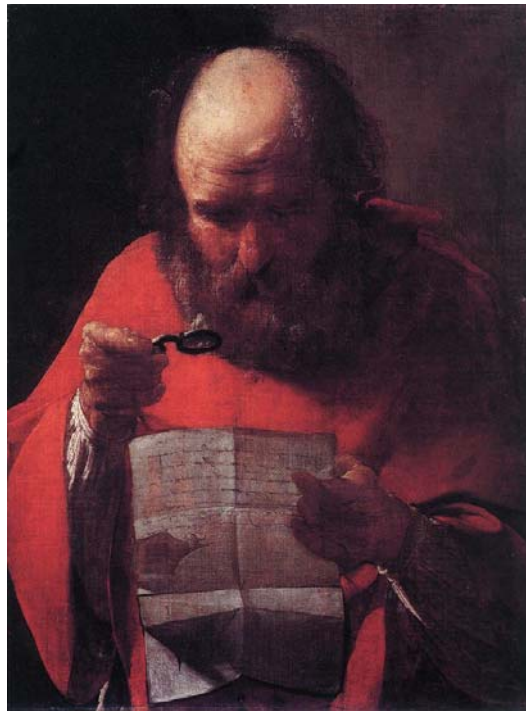


92 カラヴァッジェスキ研究 1

《読書する聖ヒエロニムス》 ジョルジョ・ラ・トゥール

2024

真鍋友範



《読書する聖ヒエロニムス》1621-1623 ジョルジョ・ラ・トゥール
ロイヤル・コレクション

* その眼鏡を持つ身体動作から《聖マタイの召命》へのオマージュ作品だ

1 人物

ジョルジョ・ラ・トゥールの人物像をウィキペディアから引用する。

ジョルジュ・ド・ラ・トゥール(Georges de La Tour, [1593年3月19日](#) - [1652年1月30日](#))は、[ロレーヌ公国](#)(現[フランス](#)領のロレーヌ地方)で17世紀前半に活動し、[キアロスкуро](#)を用いた「夜の画家」と呼ばれる^[1]。

ラ・トゥールは生前にはフランス王ルイ13世の「国王付画家」の称号を得るなど、著名な画家であったが、次第に忘却され、20世紀初頭に「再発見」された画家である。残された作品は少なく、生涯についてもあまり詳しいことはわかっていない。作風は明暗の対比を強調する点にカラヴァッジョの影響がうかがえるが、単純化・平面化された構図や画面にただよう静寂で神秘的な雰囲気はラ・トゥール独自のものである。(以上ウィキペディア2024)

2 特徴

カラヴァッジョの描いた風俗画に近い題材使用や、光と闇を効果的に使った明暗表現から、カラヴァッジョの影響を強く受けたカラヴァッジェスキであり、同時に、フランスにおけるバロック絵画の開拓者の一人として記憶される画家であった。

特に有名な作品もあり、《大工の聖ヨゼフ》は、彼の秀逸な作品の一つだろう。



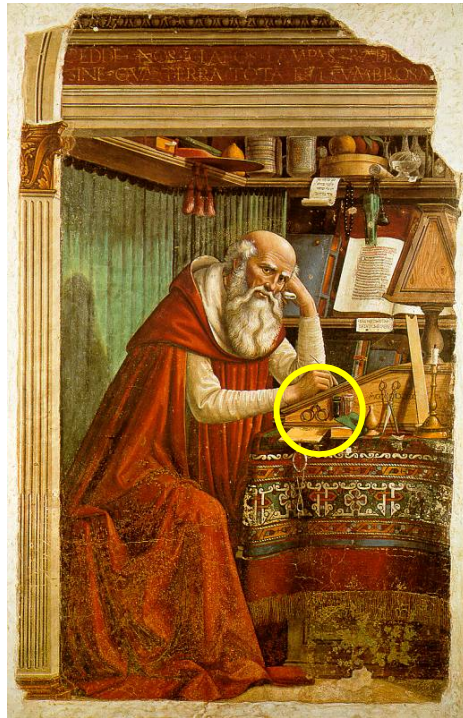
《大工の聖ヨゼフ》1642頃 ジョルジョ・ラ・トゥール
ルーブル美術館

3 聖ヒエロニムスを描いた例

ルネサンス時代に聖ヒエロニムスを描いた作品として、ポッティチェリの作品は有名だが、確かにこの作品をよくみると、一部に眼鏡が描かれている。
(イエロー円内)

余談だが、すでにこの時代（16～17世紀）に、フィレンツェでは眼鏡が発明されていたというのは驚きだ。

フィレンツェのこの作品を知っていた美術史家なら、このジョルジョ・ラ・トゥールの《読書する聖ヒエロニムス》を、オルサンニケーレ聖堂にあるポッティチェリ作品からヒントを得た作品だと考えたかもしれない。特に頭部の薄毛や、髭の容貌にも両者に似たところがあるからだ。



《書斎の聖ヒエロニムス》ポッティチェリ

* 手持ちメガネが書見台横に掛けられている。(イエロー円内)

4 カラヴァッジョ絵画との出会いはあったのか

ここまでの検証では、題名に矛盾は無いように考えられる。

しかし、ジョルジョ・ラ・トゥールは、この作品を画家人生の初期、つまり1621—1623年に描いているが、当時は新しいイタリア・バロック会が、ヨーロッパ中に影響を与えた時代であった。

ジョルジョ・ラ・トゥールがイタリアへ行って学んだという記録は無いようだが、(ウィキペディア・2024)イカサマなど、カラヴァッジョの描いた風俗画と同じテーマでの同様な風俗画を描いていることから、ほぼイタリアで学んだことは間違いないだろうと考えられる。

では、カラヴァッジョを学んだのなら、必ず訪れたに違いない聖堂がある。

それは、ローマのサン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂だ。

ジョルジョ・ラ・トゥールは、ここでカラヴァッジョの《聖マタイの召命》を見たのだろう。

では、何を見たのか。当然当時は革新的なバロック絵画に於けるリアリズム表現を見たのだ。

つまり、登場人物の身体動作を一つ一つ読み取ることで突然現れる物語の劇的結末を特徴とするバロック・リアリズム絵画だ。

5 ジョルジョ・ラ・トゥールと《聖マタイの召命》

何故なら、ジョルジョ・ラ・トゥールは、《聖マタイの召命》を正しく読み取れる画家であった。これは、オランダのテル・ブルッヘンと共通だ。

画面内で召命された弟子とは、眼鏡を持った年配の収税人であることに気付ける画家だったのだ。

つまり、この眼鏡をモチーフとして積極的に使用する人物として、絵画に登場させたジョルジョ・ラ・トゥールは、その前提に、イタリア・ローマで目にしたカラヴァッジョ作《聖マタイの召命》があった、と推定できるのだ。

6 結論

《読書するヒエロニスム》は、カラヴァッジョの描いた《聖マタイの召命》にインスパイアされた可能性のある高い作品だ、と推定される。